

## 1. 本日の参加者（敬称等略）

1. 菊池暢浩：桐蔭学園中学校・英語科
2. 松井晋作：多摩大学目黒高等学校・総合的学習
3. 井上泉：沖縄国際大学・英語教育、翻訳通訳教育、問題解決（本日欠席）
4. 綾牧子：彰栄保育福祉専門学校・保育科（教育原理、保育者論、実習指導）
5. 野口大輔：東海大学付属高輪台高等学校・文部科学省指定校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）
6. ヨネスク・マグダレーナ：麗澤大学外国語学部、国際交流・国際協力専攻の助教
7. 清水公男：文京学院大・外国語学部/教職課程センター・教育工学（授業研究・教師教育・教育評価）  
・英語教育学
- 8.
- 9.
- 10.
- 11.

## 2. 本日の内容

### 2.1 日本 AL 学会と部会（教育評価部会）について

### 2.2 自己紹介&情報交換

### 2.3 今後の活動についての協議

例えば、

- ①理論研究： 継続的勉強会（教育評価に関する読書会：理論書。含む洋書等）
- ②実戦研究： 実践報告会（問題点の紹介と問題解決的ディスカッション等）、
- ③評価ツール開発、評価デザイン開発等
- ④評価データ収集法の研究
- ⑤出版計画：基礎理論書の翻訳、評価に関する実践事例集出版（学校種毎の事例研究中心）
- ⑥その他

### 2.4 教育評価研究に関する話題提供（別紙・清水）

1. 教育評価とは？ 誰のための評価か？ 何のための評価か？：教育に関係する各個人・組織の課題等  
評定あって「評価」なし？？

\*「教育評価とは」 [http://www.intweb.co.jp/teian/kyouiku\\_hyouka.htm](http://www.intweb.co.jp/teian/kyouiku_hyouka.htm) に加筆

「教育評価」に関しては、絶対評価・完全習得学習・適正処遇相互作用・形成的・総括的評価などの用語がこれまで盛んに使用されてきた。これらの理論は1960年代に次々と提唱され、教育評価の考え方の基盤と理論が確立した。だが、「評価」は他の領域に比べてきちんとした理解が得られていない領域だともいわれている。評価活動や目的が多岐にわたるからだろうか。そもそも「評価」は誰が何を評価することなのか。そして何を目的としているのか。はっきりしているのは、評価とは、最終的には生徒のために、教師が行うものであるということ。尚、行政が教育行政的目的のために行う評価もあるが、ここでは学習評価に限定する。

学習評価活動は一般的には、教師が自分の指導の効果や生徒の学習の成果を評価し、指導に生かすことを通して授業内容を完全に理解させることを目指す。ブルームの完全習得学習理論（マスタリーラーニング）が有名である。完全習得学習理論では、「指導と評価」を一体的に考え、評価は指導のための手がかりを得る手段とされる。「診断的評価」・「形成的評価」・「総括的評価」の3つの評価を通して、ほぼ全ての学習者に一定水準以上の学力を保証することを目的としている。また、測定と評価は2つで1つであるといわれている。評価を欠いた測定は意味がないし、測定を欠いた評価も妥当性・信頼性に関しては十分ではない。尚、評価の客観的な側面に注目して教育測定といわれることもある。

学校教育の過程ではさまざまな段階での評価がある。近年、ますます多岐・多様になってきている。何のために、何を評価しようとするのかにより、評価の内容も大きく変わってくる。年度初めなどに行われる診断的評価、授業中の態度や意欲などの評価、宿題・課題・提出物の評価、授業の区切りごとに行われる到達度テストなどの形成的な評価、中間・期末テストなどの総括的な評価など。さらに近年では、教育行政の立場から、市や県、さらに国が行う学力到達度検査なども増えている。学習の結果をテストという形で評価するのではなく、生徒の理解や思考の過程などを継続して評価しようとするポートフォリオという手法も注目されている。特に、点数の集計による評価から点数化しにくいものを評価しようとする動きが出ている。教育の場で行われる評価は「教育評価」といえるが、その実施目的により、実施方法や出題内容や結果の集計方法、評価資料などで大きな違いがある。それらの評価を一括して捉えることは困難だろう。教育評価の目的により、方法や内容や資料も変わってくるからである。近年の教育評価は、ほとんど「到達度評価」一色といっても過言ではない。教育目標に対する到達の程度を評価しようとするもので、教育目標に準拠しそれを規準とすることから絶対評価といわれる。だが、最終的に個々の到達度評価をABCや5段階に評価する段になると、相対的な評価手法をとり入れることで客観性や公平性を確保しようとしている現実もある。

\*教育評価の目的

教育現場で評価を考えた場合、児童生徒＝学習者を目的とするものと、教師を目的とするものに大別される。だが実際には、誰のための評価かの判断は難しい。多くは、学習者を目的とすると同時に指導者の側の活用も目的とするなど、複数の目的をもつものが多い。入学試験は、入学者数を選抜するためのテストであり、教育評価とはいえない。また、行政が教育行政の施策を主目的として行う検査や調査も、教育評価から外れる。しかし、学校や保護者等へのフィードバック情報により、広義の教育評価に含まれる。評価の目的は多様だが、どの評価も最終的には子供たちの人間的成長と学力の向上をめざすことになる。学習者のための評価といえば聞こえは良いが、いわゆる形成的評価は少なく多くは管理目的の総括的評価になることが多いように思う。評価はやはり、

評価される側よりも評価する側の都合によることがおおいが、やむを得ない現実か。ABC 3段階評価のCと評価された生徒のBに上げるための指導の体制、5段階評価の2や1の生徒の指導はどうするのか。評価のしっぱなしの現実をどう改善していくのか。「評価と指導」の一体化が言われるが、評価と指導のサイクルを保証する具体的なシステムがないと、掛け声だけで終わってしまう。

### ①学習者のため：学習者に、学習の到達程度 of 情報を与えることを目的とする

教授者が学習者に対し、どこまでわかっているか、どこが間違っているか、これからどのような学習をするかという情報をフィードバックするのが目的。学習者は、この情報を元に正しい自己評価をし、何をどう学習していけばよいかの指針を自分で作り上げることができる。そのためにはわかりやすいフィードバックが必要となる。学習者には、多くの場合、保護者が含まれる。しかし、到達すべき学習目標は、学習者にどう提示されているのか。学習目標の達成程度を学習者に知らせても、目標に到達するための方略はどうか。

### ②指導者のため：教師＝教授者が指導のための資料を得ることを目的とする

教授者が個々の学習者の学習指導をどのように行うかを定めるために必要な情報を得るために行う。学期や単元が始まる前には、学習者のレディネス（学習準備状態）を把握し、指導内容の方針を決めるために用いる。また、指導途中ではどの程度理解が進んでいるかの把握に用い、指導後では指導内容、方法はどうかであったかを客観的に把握するのに用いる。これらにより把握した情報を元に、次の学期、単元、学年に向けて指導方針や方法、教材などを決める。学級や学年全体の「評価と指導」の方略は策定できても、個々の生徒の学習目標への到達程度を踏まえた学習指導はどうか。形成的評価は学習者の学力「形成」のための評価だか、学習者個々に対して適用し、学力水準を保証していくことが課題である。

### ③管理目的や研究目的のため

現実的には教育評価を行う目的も様々で、次のようなものがある。

- (1) 教育行政のための資料としての評価（教委や文科省の学力調査など）
- (2) 学校の管理・運営の資料としての評価
- (3) 保護者の参考にするための評価
- (4) 子どもの処遇決定のための評価（資格認定、振り分け、選抜）
- (5) カリキュラム改善のための評価

利用目的に応じてどのような評価方法がよいかを判断していく必要がある。多くの評価は複数の目標を設定しがちだが、内容や方法の設定が散漫になってしまい、どちらも中途半端になってしまうことが多い。やはり、適正な評価には、内容・方法・目的のバランスが必要である。目的を明確にし、そのための最適の手段と評価方法を採用する必要がある。

## 2. 学習成果の評価タイプ（神奈川大学 FD NEWS LETTER No.21(2017) 第2回FD研修会資料より）

下の図は、学習評価は、①「直接評価—間接評価」、②「量的評価—質的評価」、③「科目・教科（コース）レベル—機関（大学・各学校種と考えて下さい）」の3つの軸で把握が可能である。又、3番目に軸である③と①を組み合わせると、下の表にあるように、科目レベルでの直接評価はテスト・レポート、間接評価は生徒・学生による授業評価、プログラムレベルでの直接評価は卒論・卒業課題、間接評価は卒業生調査、機関レベルの評価は学生意識調査や雇用主調査などになる。

紹介した例は大学に限定したものではあるが、それぞれの学校種に共通した評価の枠組みである。しかし、評価のタイプごとに評価目的や機能が異なるので、1つのタイプの評価を別のタイプの評価で代替することは不適切である。それぞれのタイプを評価目的と機能に応じて使い分ける必要があるが、大事なのは①しっかりとデータを集めること、②評価負担が増えないように「やり過ぎない」こと、そして、一番大事な③「教育的瞬間」（あれ、おかしぞ、すごいな、どうした・・・等）を学習評価のきっかけにすることである。

Cf1, 指導のチャンス「教育的瞬間」をとらえるセンスを鍛えよう

子どもの帰った放課後の教室で、「ああ、あの時、子どもに指導を入れるチャンスだったなあ。そのチャンスを見逃してしまったなあ」と、今日の自分の指導を振り返ることがあります。子どもたちはとても敏感で、学校生活の様々な場面で、教師に「ここ、叱るところでしょ」「ほめてほしいのになあ」と思っているのかもしれませんが。そして「あの時、あの言葉を、あのタイミングで先生に言われたからこそ、分かったんだよなあ」と子どもは感じるでしょう。指導しなければならない瞬間をとらえた時に、教師がまずやらなければいけないことは、この時の「状況の本質」を瞬時的に的確に見極めることです。例えば、音楽の授業で、ある子が歌いました。その時、クラスの中から笑い声が起きました。先生は何をしたらいいのでしょうか？

- (1)クラスのみんなを叱る、(2)歌った子を励ます、(3)一緒に笑う、(4)その他

(1)~(3)は全て×です。まず第一にすることは、行為ではなく、その時の状況を見極めることなのです。「笑いの質」を見極めることです。つまり「これは温かい笑いか？ 冷たい笑いか？」「ノリのいい笑いか？ バカにした笑いか？」というような見極めです。

当然、冷たい笑いやバカにした笑なら注意を与える必要がありますが、温かい笑いやノリのいい笑いなら教師も一緒に笑っていていいでしょう。

温かい笑いやノリのいい笑いまでも教室から奪うと、冷え切ったしらけた空気が漂います。こうなると、子どもの自由な言葉もなくなり、心通い合う授業どころではなくなります。

有名な実践家である斎藤喜博氏は、「教育とか授業とかにおいて『見える』ということは、ある意味では『すべてだ』といってもよいくらいである」と述べています。

私は、先ほどの例で言うと「笑い=悪いこと」のような短絡的な指導パターンをする先生をたくさん見てきました。瞬間的に状況を鑑識するセンスに乏しいのです。

それでは、教師はふだんから何を準備していけばよいのでしょうか。それは次の三つのことだと考えています。(1)子どもに関する情報を徹底的に収集しておく、(2)子どもと向き合う心がまえ(覚悟)を高めておく、(3)指導法の開発・工夫をする

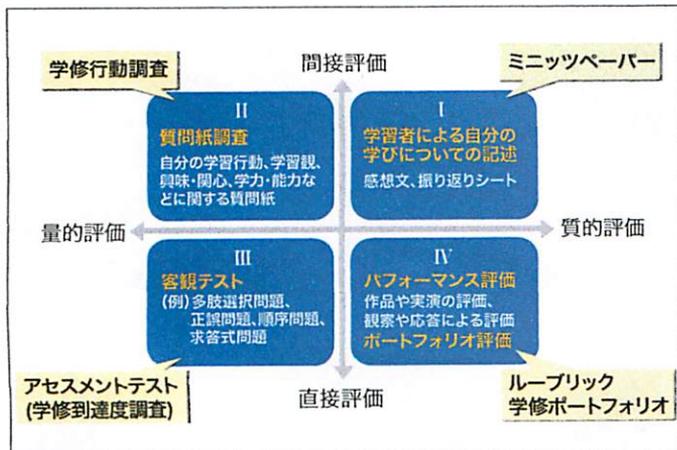
指導法の開発・工夫して、たくさんの持ち駒を持っておかないと、いざという時に打つ手がないという状態に陥ります。ふだんから指導の持ち駒を多くしていく努力をしておかねばなりません。

(高見仁志：兵庫県公立小学校教師（18年間）、湊川短期大学、畿央大学を経て、佛教大学教育学部准教授）

Cf2,

「ひとごとの学び 切実な学び/思考停止の学び 問いが生まれる学び/「手のひら」の上の学び 「手のひら」を飛び出す学び」、鹿毛雅治著 「こどもの姿に学ぶ教師」（教育出版）

学習評価の4つのタイプ (①×②)



3つのレベルの違い (③×①)

	直接評価	間接評価
科目レベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題 (アサインメント)</li> <li>試験・小テスト</li> <li>標準テスト</li> <li>レポート</li> <li>フィールドワーク・インターンシップ・サービスマーケティング・臨床実習などの観察</li> <li>研究プロジェクト</li> <li>授業中のディスカッションへの参加</li> <li>ライティング・プレゼンテーションなどのルーブリック得点</li> <li>芸術的な演技・演奏や作品</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生による授業評価</li> <li>アクティブラーニングに使った授業時間の比率</li> <li>サービスマーケティングに使った時間</li> <li>宿題に使った時間</li> <li>科目に関連した知的・文化的活動に使った時間</li> </ul>
プログラムレベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャプストーン・プロジェクト、卒業論文・卒業制作</li> <li>資格試験の合格率・得点</li> <li>学生の刊行論文や学会発表</li> <li>雇用主やインターンシップ監督者による評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インタビュー (学生、教員、雇用主)</li> <li>就職状況</li> <li>雇用主・卒業生調査</li> <li>学生意識調査</li> <li>大学院入学率</li> </ul>
機関レベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>全学の学生を対象にした学力テストの成績</li> <li>一般教育・学際的コア科目などの全学必修科目での課題のルーブリック得点</li> <li>サービスマーケティングなどの機関プログラムでの学びについての回答</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の意識・活動調査 (機関独自調査、業者調査、全国調査 (例: NSSE))</li> <li>科目選択と成績のパターンの分析</li> <li>機関ベンチマークを含む年次報告 (卒業率リテンション率、卒業生のGPA など)</li> </ul>

### 3. 学習評価の難しさ

- (1) 可能な限り「客観的で公平な評価」であること。
- (2) 測定の実施と方法が適正であること。「妥当性と信頼性」への配慮。
- (3) 「合目的的」であること。「教育」評価ということを外れないこと。
- (4) 「どのような学力を評価」しようとしているのか。基礎・基本的な知識・理解なのか、思考力や課題解決力なのか。そのためにはどのような評価材を採用すればよいのか。
- (5) 目標への到達程度を評価しても、到達程度の低かった生徒に対してどうやったら学力水準を保証していくことができるか

### 4. 学習評価の視点から問い直す「学び方・教え方」

学習の評価：assessment of learning（成績の決定・教師が評価主体）

学習のための評価：assessment for learning（授業・学習改善/教師（生徒）が評価主体）

学習としての評価：assessment as learning（学習の自己調整・生徒が（教師）が評価主体）  
→「自己調整型学習」、実はALのコア要素

課題：学習と評価をどうつなげるのか？ 自律的な学習者をどう育てるのか？

評価デザインをどう再構築するのか？（何を、いつ、どのようにみとめるのか？）

教師の授業力量をどう上げるのか？等

### 5. 学びを評価するまえに、学びをどう見とめるのか？

閉じた系の学習評価：system アプローチ（PDSのサイクル）

到達度評価・目標準拠評価

VS

開いた系の学習評価：総合的学習の実践を通して育まれる学力をなんとか

とらえたいという願いがポートフォリオ評価に向かわした

「逆向き設計」と「ルーブリック評価」の限界、学習の個別化の問題とその向かうところ

### 6. 私の学習評価実践の紹介

一枚ポートフォリオを使った学習評価(OPPA)

# 一枚ポートフォリオ

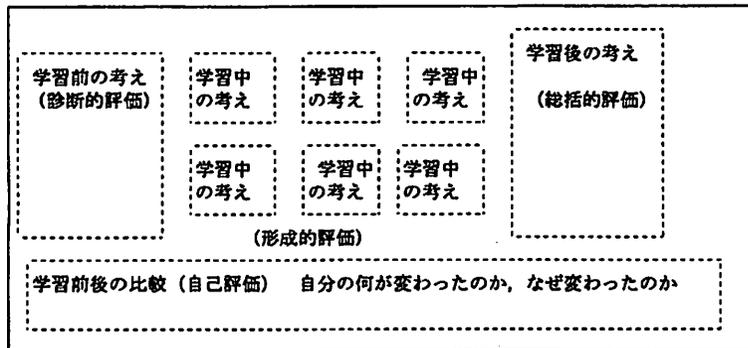
一枚ポートフォリオとは

一枚の紙面に、学習前・学習中・学習後の考えを児童が書き、自己評価や教師の評価と指導に生かせる「指導と評価の一体化を具体化」したシートである。

ポートフォリオ評価は、総合的な学習の時間などで児童が作成したノート、作文、絵などの作品、メモなどをすべて集めてファイルしたものであるが、一枚ポートフォリオは一枚の紙面に表した記録である。「総合的な学習の評価」が話題になった頃、さかんに紹介された。しかし、ポートフォリオ評価は、ファイルが膨大になり教師評価にも児童評価にも使えないのが現状ではないか。

一枚ポートフォリオは「一枚」であるからこそ使える

たとえば、一枚の紙面を次のような枠組みで作成する。



一枚ポートフォリオは次の1～8のように生かすことができる。

## 1 学習前の児童の実態を把握する。

児童に学習前の考えを書かせることで、診断的な評価ができ、授業展開の工夫をすることができ。

## 2 学習履歴を記録する。

児童が授業で学習したことで、大切なこと、わかったこと、疑問に思ったことなどを記録する。後でこの記録をみることで児童は学習を振り返ることができる。

また、この学習の記録を教師がみることで形成的な評価ができる。そして、足りないことを補ったり、誤りを修正したりできる。

## 3 一枚ポートフォリオから授業を評価する。

学習中の児童の記録をみると、子どもたちが授業によってどのような考えを構築したのかが分かる。このことは児童の形成的な評価であると同時に、教師にとっては授業における発問の適否、使用した教材の効果などの授業評価である。

## 4 学習後の成果を把握する。

学習前と同じ問題に答えることで、総合的な評価ができる。そして、補充的な指導を行ったり、授業の評価をしたりできる。

## 5 自己評価ができる。

児童に学習前の考えと学習後の考えを比較させることで、つぎの1～3のような自己評価をさせることができる。

### ① 学習の意味を知り、学習意欲を育てる。

学習前後の考えを比較することで、自分の変化が実感でき、「学習するとできるようになる。学ぶことは大切なんだ。」と学習することの意味を感じる。

また、「学習すると自分は変わる。また学習しよう。」と学習の意欲を持つ。

### ② 学習前の考えを変えることができる。

児童は、「白紙」の状態に学習に臨んでいるわけではない。何らかの既得の知識や経験をもちに学習に臨んでいる。学習前の知識の中には、誤ったものも多く、学習しても強固でなかなか変わらないものがある。また、授業で一時的に変わってもすぐに元に戻ってしまうこともある。そのような誤った知識を正しい知識に変えるためには、自分の学習前の考えと学習後の考えを比較し、「自分は学習前にはこんな思いこみをしていました。でも本当はこうなんだな」と確認することが有効である。

### ③ 学び方を学べる。

自分はなぜ変わったのかを自己評価することで、「～の活動をしたからかわった」「〇くんの意見を聞いたから」「～という説明を聞いたから」「～で調べたから」など、どのような学習方法が効果があるのか自ら気づくことができる。

## 6 一枚ポートフォリオの作成は授業の吟味である。

教師が一枚ポートフォリオを作成するためには、学習後にどのような力をつけるのか(学習目標)が明確になっている必要がある。学習前後の考えを書かせるための問題や質問はここで何を学ぶのが明確になっていないとできない。そして、学習前の考えを変えるためにはどのような指導が必要であるのかを考えなくてはならない。一枚ポートフォリオを作成する中で、授業の構想ができるのである。

## 7 児童の資質能力を向上できる。

一枚ポートフォリオに児童の考えを書かせることで、「自己評価能力(メタ認知)を高める」「知識を定着させる」「学習内容を使って推論できる」「学習意欲を育てる」など資質や能力を伸ばすことができる。

## 8 説明責任が果たせる

一枚ポートフォリオを児童に返し、保護者がみることは、児童が何を学んだか、学習前と学習後にどのように変化したか、など学習の様子を保護者に知らせることになる。これは授業内容はやその成果の説明責任を果たしたといえる。

参考文献 「子どもの学びを育む 一枚ポートフォリオ評価 理科」堀 哲夫編著  
2004 日本標準

# English Learning Portfolio

( ) 番 名 前 ( )

○ これまでに習った動詞を、書けるだけ書き出してみましょう。  
目標 「1分間に3つ以上、書きましょう」



\*be動詞は含まない  
\*相談や教科書を見てOK

Date (日付):	weather (天気):	評 価
【音読した Unit の記録】 (例: Unit 1-1 ~Unit 2-1)		A B C
【英語】		
【授業のふりかえり / あなたができたことやがんばりたいこと】		

Date (日付):	weather (天気):	評 価
【音読した Unit の記録】 (例: Unit 1-1 ~Unit 2-1)		A B C
【英語】		
【授業のふりかえり / あなたができたことやがんばりたいこと】		

Date (日付):	weather (天気):	評 価
【音読した Unit の記録】 (例: Unit 1-1 ~Unit 2-1)		A B C
【英語】		
【授業のふりかえり / あなたができたことやがんばりたいこと】		

Date (日付):	weather (天気):	評 価
【音読した Unit の記録】 (例: Unit 1-1 ~Unit 2-1)		A B C
【英語】		
【授業のふりかえり / あなたができたことやがんばりたいこと】		

Date (日付):	weather (天気):	評 価
【音読した Unit の記録】 (例: Unit 1-1 ~Unit 2-1)		A B C
【英語】		
【授業のふりかえり / あなたができたことやがんばりたいこと】		

☆単元を学習してのふりかえり!

Date (日付):	weather (天気):	評 価
○学習してきたことをふりかえろう! (1)「私は昨日、〇〇を見ました」という英語を書きましょう。 *watch の過去形		A B C
(2)「私は今朝(this morning)〇〇を食べました」という英語を書きましょう。 *eat の過去形		
(3)「あなたは〇〇しましたか?」という英語を書きましょう。		
○単元の学習を終えて、自分に身についたりできるようになったりしたことを書きましょう。		